

小沢重男氏による元朝秘史のパスパ文字復元について

中村雅之

1. 『元朝秘史』のパスパ文字復元

現存する『元朝秘史』のテキストは、14 世紀末に漢字音写によってモンゴル語を記したものであるが、もとは 13 世紀前半にウイグル文字で記されたものと考えられている。しかし、現存の漢字音写本が直接にオリジナルのウイグル文字本によったものか、あるいはウイグル文字本からパスパ文字本へのリライト本を介して作られたものかについては過去に種々の議論があった。『元朝秘史』の詳細な訳注である小沢重男 1984 の巻末に巻一部分のウイグル文字とパスパ文字による復元が付されているのも、そのような議論を踏まえてのことであろう。(パスパ文字復元は巻末の写真を参照)

ウイグル文字テキストの復元については、『元朝秘史』からの相当量の引用を含む 17 世紀の『アルタン・トプチ』を参考にできることから、かなりの精度が期待できる。一方、パスパ文字版については、聖旨碑文などの正書法を参考にして復元せざるを得ないが、小沢氏の復元には碑文のパスパ文字モンゴル語の表記法とかなり異なる部分がある。以下、そのような部分を指摘しつつ、元代パスパ文字モンゴル語の正書法を確認したい。なお、パスパ文字の翻字方式は吉池 2005 による。

2. 分かち書き

パスパ文字は音節単位で分かち書きすることを原則とする。一音節内の字母は連結線によって繋がれる。連結線は通常右端に施されるが、母音「o」の下に字母が続く場合には中央から連結線が延びる。しかし、小沢氏のパスパ文字表記ではしばしば連結線が表記されない。第一行「monj」「t'ob」や第三行「reg」などを始め、連結線のない例は相当数にのぼる。

3. 長母音

パスパ文字における長母音の表記はチベット文字の方式に倣っている。例えば、「a」の長母音は子音の後に(チベット文字の有声 h に由来する)「・」を付して表す。「la」を表したければ、パスパ文字「l」と「・」とを連書する。「l・a」または「la・a」と転写されることが多い。また、「de」を表す場合には、パスパ文字「d」と「・」と「e」を連書する。「d・e」または「de・e」と転写されることが多い。

「皇帝の」に対応するパスパ文字モンゴル語は碑文では通常「q・a-nu」と表記される(ハイフンは分かち書きを示す)。小沢氏の表記では「qa・anu」となっており(第二行)、風変わりである。一音節ごとに分かち書きをするという原則にも反しているが、「・anu」を連書したのはおそらくケアレミスであろう。むしろ、「qa」と「・a」を分けたことの方に小沢氏なりの意図があったと思われる。第三行の「de・e-re」についても同様で、本来ならば「d・e-re」が期待される。

パスパ文字「・」はここでは長母音を表示するための単なる記号と見なしうるのであるが、ウイグル文字表記で「γ/g」に対応することから、純粋な長母音ではなく、中間に有声の弱摩擦音や母音の途切れ(hiatu)を想定する論がある。小沢氏が「qa・anu」「de・e-re」「k'e・en」(最後の例は § 18 に見える)のように綴るのも、純粋な長母音ではなく母音間にhiatusを想定していたからであろう。し

かし、それは一般的な表記とは異なる。碑文のパスパ文字モンゴル語では「q·a-nu」「k·en」のように綴られ、hiatus を想定することを許さない。一音節として連書されており、長母音と解釈すべきである。

4. 二重母音

碑文に見えるパスパ文字モンゴル語の二重母音の表記法には次の三種の方式が確認できる。

- ① 長母音の場合と同様に「·」を介して「ér-k'e·ud」「é-du·e」などとする。
- ② 「bi-ci-beé」「bu-k'ue」のように母音の後に「é」を付して降り二重母音を表す。
- ③ 「'a-t'u-qayi」のように子音の後に「y」と「i」を連書して降り二重母音/-ai/を表す。

このうち①は分かち書きされているから、二重母音と呼ぶことが妥当かどうかは検討が必要である。ただし、例えば「'a·u-la」(/aula/)のような場合には、それを分かち書きせずに「'a·u-la」と綴ることは不可能である。「a」はゼロ表記であるから、その綴りでは「'·u-la」(すなわち ula)としか読めないのである。この場合、正書法の制限によって一音節が連書されない例ということになる。

②は「é」の音価をどう見るかという問題と関連するが、この場合には/i/に近い音と見ることにそれほど無理はない。/-ei/や/-üi/のような降り二重母音である。

③は風変わりな綴りに見えるが、仮に「qa·i」と綴ると二音節ということになってしまい、「qa·i」のつもりで綴ると「q·i」になってしまう。そのために「q」「y」「i」を連書することによって/qai/を表したものである。小沢氏の綴りでは/qoai/のつもりで「qo·é」、そして/ajiai/のつもりで「'a-j'i·é」(ともに第四行)としており、二重母音/-ai/が上手く表記されていない。それぞれ「qo·ayi」「'a-j'i·ayi」と表記すれば、標準的な綴りになる。

5. まとめ

一音節内にしばしば連結線が記されず、あるいは第二行「jin-gis」の最初の母音「i」になぜか語頭形が用いられる(「n」に似た形になる)など、小沢氏のパスパ文字復元には種々の非標準的な綴りが見られるが、全体の特徴として、漢字音写テキストの表記から忠実にパスパ文字に還元しようという意図が感じられる。例えば、第一行の末尾「t'ob-ča·an」は、ウイグル文字版では「t'občiyān」と復元されている。パスパ文字の復元は、明らかに漢字音写「脱察安」を意識したものである。前述の「qa·anu」「de·e-re」「k'e·en」にしても、漢字音写を忠実になぞった結果と考えることもできる。小沢氏には碑文のパスパ文字モンゴル語に関する論考もあり(小澤 1962)、その正書法には十分な知識があったはずである。にもかかわらず、小沢 1984 におけるパスパ文字復元文が碑文の正書法から離れて、必要以上に漢字音写を意識したものになっているのは、主に服部四郎氏によって主張されたパスパ文字本原典説(現行本秘史が直接にはパスパ文字本に拠ったという説)に強い影響を受けていたことの反映かも知れない。小澤 1994 では積極的にウイグル文字本原典説を展開していることを考慮すると、なかなか興味深いものがある。

